

飛行翼片

佐野 洋



飛行翼片
佐野 洋

毎日新聞社

片翼飛行

一九七四年十二月十日 印刷

一九七四年十二月二十日 発行

著 者 佐野 洋

編集人 桑原隆次郎

発行人 朝居 正彦

発行所 毎日新聞社

〒一〇〇 東京都千代田区一ツ橋

〒五三〇 大阪市北区堂島上

〒八〇二 北九州市小倉北区鍛屋町

〒四五〇 名古屋市中村区堀内町

印刷 東京ベル印刷

製本 正文社

片翼飛行

〈主な登場人物〉

宮森陽子（機長の愛人・銀座バー「雨芽」のホステス）

中内光江（NWA航空東京支社長付秘書）

トーマス・エグバート（NWA航空東京支社長）

ロバート・ライアン（NWA航空パイロット）

沢島弁護士、桂田浩一医師、等々力隆平カメラマン、矢口竜太雑誌社社長

・元パイロット、安瀬寿一元警官（以上五人2Bクラブ会員）

富平、梅永、谷岡（以上刑事）

イブリン・ウェルナー（元NWAスチュアデス）

エドワード・ホイットマン（ANP記者）

マイケル・ハドソン（ANP記者）

フレデリック・クラーク（AAN記者）

ロバート・スタインバーク（フリー・ライター）

高戸邦夫（中央日報記者）

目次

§ 7	§ 6	§ 5	§ 4	§ 3	§ 2	§ 1
空中散歩	供述拒否	外人機長	参考人	搭乗者名簿	記者会見	目的地変更要求 第一日及び第二日
第六日の(1)	第五日の(2)	第五日の(1)	第四日の(2)	第四日の(1)	第三日	
.....						
119	102	84	61	40	22	5

§ 14	§ 13	§ 12	§ 11	§ 10	§ 9	§ 8
空中 会 話	曲 技 飛 行	女 性 不 信	搜 索 令 状	飛 行 機 事 故	退 職 機 長	追 跡 飛 行
第八日	第七日の (4)	第七日の (3)	第七日の (2)	第七日の (1)	第六日の (3)	第六日の (2)
………	………	………	………	………	………	………
279	255	232	209	185	162	141

上西
康介

装
丁

1 目的地変更・第一日及び第二日

宮森陽子は視線を時計に走らせた。二時四十分。そろそろ、風呂にはいろうか、と考えて、彼女はソファから身を起した。

入浴し、着替えをし、美容院に行く。店にはいる前に、ちょっと買物をする必要があった。全身に、まだだるさが残っており、もう少し、ぼんやりしていたいが、そうも言ってはられないようだ……。

ソファから立ち上ろうとした瞬間、陽子は小鼻を動かし、彼の匂いがしたように思ったのだ。

彼を送り出したあと、まだ、シャワーも浴びていない。彼女のからだの、そここに、彼の体臭が残っているらしい。

彼女は、もう一度、鼻を動かし、腕のあたりの匂いをかいだ。しかし、求めた匂いはそこになく、彼女自身の香水のにおいだけが鼻を刺した。

舌打ちをして、テレビを止める。そして、すぐ苦笑した。テレビの音声が、自分の嗅覚を妨害しているように錯覚したことが、おかしかったのだ。

そのとき、チャイムが歌うような音を立てた。

「はい」

と、陽子は、精一ぱいの声で答えた。

だが、チャイムの音は、また繰返された。この部屋のチャイムは、ボタンを一度押すと、三度音がするしくみになっている。

そのことは、十分に知っていながらも、最初の音で返事をし、そのあとまで、音が聞えると、陽子の神経は、いらだつのだった。

陽子は、ドア越しに、

「どなた？」

と聞いた。

「宮森さんですね？ NWAのものです」

「あっ」

陽子はあわてた。しかし、ドアは開けられない。彼女はネグリジエを着ていた。

「あのう、飛行機が、どうかしたのですか？」

「ええ、ハイジャックに。とにかく、来て下さい」

「行くって、どこへ？」

「会社です。すぐお連れするようにと」

「はい。じゃあ、いま着替えをして……」

「とにかく、急いで下さい」

「はい」

男は、さらに何かを言った。

彼女は、しかし、男の声を聞いていなかった。寝室にはいり、洋服ダンスを開けた。そして、そこにぶら下っている服

を、さあつと見渡し、黒っぽいワンピースを取り出した。

それをベッドに投げるようにし、着替えを始めた。

ふと、黒はよくないかな、と考える。しかし、これは彼が作ってくれた服だ。そして、この服に合わせて、真珠のネックレスも買ってくれた……。

それに、この服以外は、一体に派手で、カラー・テレビに写された場合、却っておかしいかもしれない……。

陽子は、手早く着替えを済ませた。しかし、ネックレスは、大げさ過ぎるように思い、代りに、かめを型どった、銀色のブローチをつけた。これは、地下街のアクセサリー店で買ったもので、安物であった。

どうも、きょうは、店に出る余裕はないらしいから、それなら、安物のブローチでも、構わないと考えたのだった。

「済みません。お待たせしてしまつて」

陽子はドアを開けた。

しかし、その瞬間、息をのんだ。

ニュー・ワールド航空（NWA）東京支社長付秘書の中内光江は、タイプを打つ手を休め、窓の外に目をやった。別に意味はない。タイプに疲れたのでもなかった。

いま、支社長室には、彼女一人しかいなかった。支社長のトーマス・エグバートは、隣の会議室に、六人の部長たちを集めて、会議をしていた。

ときどき、ドア越しに、エグバートの咳払いが聞える。エグバートは、呼吸器に癌があるのではないかと思われるほど、しばしば咳払いをする。その癖、葉巻をやめようとはしない。

向いのビルに電光式の時計がついている。15:35と表示されていた末尾の数字が、3に変わった。

中内光江は、自分の腕時計を見た。それは三時三十五分を示していた。あの電光時計と二分違うわけだった。

あのビルまでは、どのくらいの距離があるだろう、と彼女は考え、途中で苦笑した。光が音とは違うのだということ、改めて思い出したのだった。ことと向うのビルが、いくら離れていようと、それは関係のないことであつた。恐らく、彼女の時計が、二分進んでいるのであろう。

しかし、彼女は時計を直さなかつた。電光時計が正確だという保証がない以上、針を修正する必要があるまい……。

と、卓上の電話が鳴った。

中内光江は、素早く送受器をとった。

「はい、支社長室です」

彼女は、日本語で言った。NWAの東京支社は、日本人を電話交換手に使っていた。むろん、彼女たちも英語が喋れる。

「外線から、支社長さんにお電話なんです」

交換手の口調には、甘えるような響きがあつた。塚本悦子だ、と中内光江は思った。もう三十近いはずなのに、声だ

け聞いていると、二十前の少女のように感じる……。

「ボスは、いま、会議中だわ」

「でも、NWAの運命と人命に関することだとか……」

塚本悦子は、泣きそうな声で言った。

「それ、外国人？」

「ううん。日本人らしいわ。何となく、言葉に訛があるみたいだけれど……」

「いいわ。つないでちょうだい」

中内光江は、送受器を左手に持ち、右手にシャーペンシルをとった。速記用のノートは、机の左隅に据けてある。

「もしもし、支社長かね？」

口調は横柄だが、声は若かった。

「支社長は、ただいま、会議中ですので、私が承ります」

「あんたは？」

「秘書でございます」

「秘書じゃ、しようがないな。支社長がだめなら、副支社長でもいい。それとも、支配人とか何とかいうのかい？」

「ご用件を承りたいのですが……」

「503便のことだよ。われわれは、503便の目的地変更を要求する」

503便は印度回りのバリ行きであった。十四時二十分に羽田を発っているはずである。

「もしもし、もう一度おっしゃって下さい」

「要するに、支社長につないでくれ給え。ことは人命に関係

することなんだからな」

「でも……」

「急ぐんだ」

と、相手は声を荒げた。中内光江は、受話口を耳から離して、顔をしかめた。

「それとも……」

相手は再びもとの声になって言った。

「一切の責任を、あんたが負うというのなら、それでもいい」

「少々お待ち下さい。いま、支社長を呼んで参ります」

中内光江は、小走りに会議室のドアに近づき、ノックをした。すぐに返事はなかったが、彼女はドアを開けた。

エグバートが、とがめるような視線で、彼女を見た。

「電話です。503便の安全に関するこのようです」

「諸君、すまないが、待っていてくれ給え」

エグバートは、肘掛椅子から身を起すと、部長たちに言った。そして、光江を睨みつけるようにして、支社長室に戻り、自分の机の上の送受器をとった。それは、光江の桌上的電話機と、親子電話の形になっている。

「支社長のエグバートです」

と、彼は英語で言った。ついで、肩をしかめ、言い添えた。

「できることなら、英語で話してもらいたいのだが……」

それに対して、相手は、英語が喋れないと言ったらしい。エグバートは、中内光江に対し、通訳をしてくれというよう

うな身ぶりを示した。

光江は、速記のノートを開きながら言った。

「もしもし。支社長は日本語が話せませんので、私が通訳を致します」

「よし、それでは、正確に伝えてくれよ。いいか？ われわれは、宮森陽子という女性を誘拐した。彼女は、銀座のバーのホステスであるが、同時に、NWAのパイロット、ロバート・ライアンの東京に於ける愛人でもある。従って、503便の機長ロバート・ライアンが、われわれの要求に従って、同機の目的地を変更しない場合には、彼は愛人の生命を奪われることになる。そこまでを通訳してくれ」

相手の日本語は、なんとなく、翻訳調であった。要求の相手が外国人だという意識が、そうした翻訳調をとらせたのかもしれない。

中内光江は、その通りを英語に直した。

赫ら顔のエグバートの顔色が、さらに赤くなった。

クラブ『雨芽』は、八時近くなると、急に客が混み出した。

桂田たちの席についていたホステスのうち、何人かは、他の客の方に移って行き、いまは、二人を残すだけになっていた。

桂田は、テーブルのかげで、腕時計を見た。八時三十五分。テーブルで隠したのは、その動作を、沢島弁護士に見られた

くなかったためだったが、やはり、沢島には、気づかれてしまったようだ。

「おかしいな。たしかに来ると言ったんだが……」

沢島は、先刻来、何度も口にしてているせりふを、もう一度言って、首をかしげた。

「ほんと、おそいわね。いま来ないところを見ると、お休みかもしれないわね」

ホステスの一人が、気の毒そうに言う。

「でも、約束したんでしょ？」

もう一人が沢島に念を押した。桂田は、このバーは初めてだった。ホステスたちの名も知らない。先刻、教えてくれたが、すでに忘れてしまっていた。

「よく休むのかい？」

と、桂田は彼の隣のホステスに聞いた。

「え？ ああ、陽子さん？ ちょくちょく休むというほどではないけれど……」

「よし、しかたがない」

沢島は、決断をつけるように言った。「九時まで待とう。」

それまでに来なかったら、落第だ」

「あら？ 落第って、何が？」

「おれたちの会の特別会員にしてやろうかと思ったんだ。それで、きょう、この桂田さんに一緒に来ていただき、入会審査をする予定だったんだよ。しかし、審査委員を、一時間も待たすような不心得者ではしょうがない」

「先生たちの会って、何ですの?」

彼女たちは、好奇心にあふれた目で、沢島と桂田の顔を見くらべた。

「飛行機の会さ」

と、沢島が言った。

「ああ、先生、オーナー・パイロットなんですよ。陽ちゃんに聞いたわ」

「オーナー・パイロットと言ったって、五人で一機持っているだけさ」

「その五人の方が、みなさん、操縦できるの?」

「ああ……。ところが、陽子もこの春、ハワイでライセンスを取って来たというので、じゃあ、ひとつ、仲間に入れてやろうか、ということになったんだ」

沢島が、そう説明しているのを聞きながら、桂田は、

「ちょっと失礼」

と、立ち上った。

隣の席のホステスが、トイレかと囁き、桂田がうなずくと、案内に立った。

『雨芽』はビルの二階にあった。しかし、手洗所は店内にはなく、二階の階段わきのそれを、他のバーと共用にしているらしい。

彼が用を足して出て来ると、入口のところで、ホステスらしい女性が、三人顔を寄せ合うようにして、何か話している。

その中には、桂田を案内してくれたホステスもいた。

「どうしたの?」

と、桂田は聞いてみた。

「変なんです。女性用トイレが……」

と、気味悪そうに、彼女は答えた。

「もう十分ぐらい前から、使用中なんですって」

「それは、人によつては、十分ぐらいかかるかもしれないが」

「だって、いくらノックしても、返事がないんですよって」

「ははあ?」

桂田は興味を持った。もう一度便所には入り、奥のドアをノックした。耳を澄ましたが、返事がない。ノブの下には『使用中』という、赤い文字の表示が出ていた。

「中の鍵はどういう仕組みなの?」

「何て言うのかしら、留金を、こうがちゃんと落して……」

「一番単純な奴です」

「そう……」

その形式のものだったら、外から細工ができないものでもない。酔客のだけれが、ホステスたちを困らせようと、いたずらをしたのかも知れない。

桂田は、腕を組んで、ドアを眺めた。ドアは、それほど高くない。二メートル足らずであった。

「だれか、鏡を持っていないかね?」

と、桂田は、三人の顔を、順に見渡した。

「あのお、小さいのなら……」

和服を着た一人が、帯の間から、掌に入るほどの、小さな四角い鏡を取り出した。

「ああ、それでいい」

桂田はそれを受けとり、ドアに近づいた。右手で鏡の隅を持ち、それをドアの上の方にかざした。こうすれば、中の様子が、わかるはずである。

しかし、鏡の角度が不適當だったり、その中が暗かったりで、簡単には様子がわからない。桂田はつま先立ち、右手の角度をいろいろに動かしてみた。角度を、ちょっと変えただけで、鏡に写る光景が全く違って見える……。

「あっ」

やがて桂田は声を出した。

「人がいるよ。黒いものだから、よくわからなかったんだが、あれは、黒い服を着ているんだ」

「いやだあ、嘘でしょう？」

と、桂田を案内したホステスが言った。

「嘘じゃない。とにかく、ここを開けなければならぬ」

「救急車は？」

「とにかく、開けるのが先だ。それから、わたしは医者だよ」

支社長は、支社長のデスクに近づき、そこに置かれた英子。

字新聞を取り上げた。

と言って、中内光江が、いつも支社長の出勤前に、このように、英字新聞に目を通す習慣を持っていたわけではない。

今朝は、彼女にとつてとくに確かめたい記事があったのだ。その記事は、通勤の途中、電車の中で読んだ日本の新聞には出ていた。それが、果して、英字新聞にも出てゐるか。

やはり、英字新聞には、のっていないかった。それを調べながら、彼女が思っていた通りであった。バーのホステスの死体が、便所の中で発見された、というようなことは、英字新聞の読者、つまり、日本にいる外国人にとっては、どうもよいことなのだから……。

しかし、中内光江には、それは必ずしも、どうでもよいことではない。いや、そのバーのホステスは、光江の友人でもなかったし、恐らく、顔を合わせたこともないだろう。その意味では、全く無関係の、言わば赤の他人であった。だから、本来なら、すうっと読み流してよい記事と言える。それどころか、この種の記事は、見出しだけ見て、記事の本文に目を通さないことの方が多であろう。だが、けさ、彼女は電車の中で、新聞をひろげたとき、何げなく、そこを讀んでしまったのだ。

或いは、最初に、そのホステスの名前が、目にとまり、はつとして読む気になったということかもしれない。

宮森陽子、二十五歳、と新聞には出ていた。昨夜の八時過ぎ、銀座六丁目のY・Sビル二階の婦人便所の中で、その死

体が発見されたのだった。死体には、青酸化合物の中毒症状が現われていたが、現場の状況から、自殺の可能性が強いとも書かれている。

その宮森陽子という名に、中内光江は、記憶があつたのだ。光江は、秘書として、自分がとくに優秀だとは思っていない。だが、人の名を覚えることに關しては、自信を持っていた。それは学生時代からのことであつた。

だが、勘違いということもあるだろう。光江は、だから、この支社長室にはいるとすぐ、自分の机の引出しから、速記用のノートを取り出し、調べてみた……。

『よし、それでは、正確に伝えてくれよ。いいか？ われわれはミヤモリヨウコという女性を誘拐した。彼女は、銀座のバーのホステスであるが、同時に、NWAのパイロット、ロバート・ライアンの東京に於ける愛人でもある。従つて、503便の機長ロバート・ライアンが、われわれの要求に従つて、同機の目的地を変更しない場合には、彼は愛人の生命を奪われることになる』

きのう、電話を受けながら速記した部分であつた。電話では、字の説明をしてくれないから、ミヤモリヨウコになつていたが、それは、新聞記事の宮森陽子とも一致する。また銀座のバーのホステスであることも、共通していた。

新聞に出ていた宮森陽子が、あの電話のミヤモリヨウコであることは、ほぼ間違いないまい、すると……。

勢いよく、ドアが開き、

「おはよう、光江さん」

と、エグバートがはいって来た。たちまち、部屋の中に、葉巻の匂いが立ちこめる。彼は、この『おはよう』だけは、正確な日本語でいう。目をつぶつて聞けば、外人が言つたのだとはわからないような、訛のない発音である。

「お早うございます」

と、光江も日本語で答えた。

エグバートは、自分の回転椅子に坐つた。机の真ん中に置かれた英字新聞を、読みもしないで、片隅の方に押しやる。

彼は、出勤するとすぐに新聞を読むときと、全く手にしないときがある。何が基準で、その違いが出るのか、光江にはわからない。或いは、単に、その日の気分によるものかもしれない。

「すみませんが……」

と、中内光江は、エグバートに話しかけた。

「話したいことがあるのですが」

「どうぞ」

エグバートは、葉巻を火のついたまま、灰皿に置いて、頭を上げた。

「この新聞に、興味深い記事が出ています。それは、英語の新聞には、のっていないものですが……」

光江は、こう前置きして、新聞の例の記事を英語に翻訳した。それを聞き終ると、エグバートは、不思議そうに眉を動かした。

「それで？」

「この宮森陽子というのは、きのうのあの怪しい電話によれば、ロバート・ライアン機長の東京に於ける愛人だそうです。そして、きのうの電話は、彼女の生命を取引きのたねに、一つの要求を、NWAにしたものでした。ところが、彼女は、昨夜、死体で発見されています。この事実は……」

「待ちなさい」

エグバートは、強い口調で、中内光江の言葉を遮った。そして、彼女の心を読もうとするかのように、目をのぞき込んで、質問をして来た。

「あなたは、その事実を、誰か人に話しましたか？」

弁護士沢島は、二人の客を、接客用のソファーに案内した。

その二人は、築地署の刑事だった。手渡された名刺によると、四十年輩の男が、部長刑事の富平で、もう一人の、背の高い二十七、八歳の刑事は、武田という姓であった。

「お仕事中、どうもすみません」

富平は物腰の柔かい刑事であった。最初にそう断わり、前夜、死体が発見された宮森陽子と沢島との関係を知りたいと言った。

「関係と言いましても、要するに、酒場のホステスと客との関係で……」

「先生は、ゆうべ、彼女に何かご用があったらしいですね」

富平も武田も、別に手帳を出し、メモを取るような構えはしていない。しかし、富平の口調には、大体のことは調べてあるのだ、と誇示する響きがあった。

「実は、わたしは飛行機の操縦免許を持っているのですよ。それで、そういう人間ばかり、五人ほど集まって、飛行機を一機買ったのですよ」

「はあ、本当の飛行機ですか？」

「ええ、セスナ172、スカイホークと呼ばれているものです……」

「ずいぶん、高いものなのでしょう？」

と、若い武田が、身を乗り出すようにして聞いた。

「関西の宣伝会社が持っていたものの中古品を譲り受けたのですから、値段も、ちょうど手頃で……」

沢島は、敢えて、値段は言わなかった。隠す気はないが、道楽にそんな金を使ったというような見方をされるのは、嫌いであった。

「その五人の方は、みなさん、弁護士さんですか？」

「いや、弁護士は、わたし一人です。あと、医者、フリーのカメラマン、元航空会社のパイロットで現在は雑誌社の社長をしている人、それから元警察官もいますよ」

「警察官が？」

と、二人の刑事は、信じられないというような表情をした。

「ええ、神奈川県警にいて、最近退職し、ある会社の警備課長になった人です。安瀬という元警部ですが、ご存じありませんか？」

「さあ、聞いていませんね」

富平は苦笑した。

「他県のことまでは、ご存じないでしょうね」

沢島にしても、彼らが、安瀬のことを知っているとは、最初から考えていなかった。

「なるほど、それで、宮森陽子のことなのですが、そのグループと、どういうつながりがあるのでしょうか？」

富平は、話題をもとに引き戻した。

「いや、その五人がグループを作ったとき、いろいろな取り決めたのですよ。例えば、この五人以外のものには操縦をさせないとか……。しかし、その際、例外規定を定めましてね。但し、女性でライセンスを持っているものは、特別会員として、操縦をさせて上げようということになっていたのです。まあ、男ばかりより、女性がいの方が、なごやかでいいんではないか、という趣旨なんです」

「……」

富平と武田は、黙ってうなずいた。しかし、いつまでも、話が本筋に行かないことに、いらいらしている感じである。

「きのう、死んだ宮森陽子というのも、ライセンスを持っているのですよ。それで、わたしたちの仲間に、いれてやろうじゃないかということになって……」

「ははあ、彼女、飛行機の操縦ができるのですか？」

富平と武田が、顔を見合わせた。

「ええ、彼女、ハワイに行つて、免許をとつて来たのです。日本とアメリカとは、協定ができていますから、アメリカの免許は、日本でも有効なんです」

「しかし、なぜ、ハワイに行ったのです。向うの方が、試験が易しいのですか？」

「いや、その方が、安上がりなんです。ちょっと待つて下さい」

沢島は、立上つて、本棚の右隅を探した。そこには、航空関係の雑誌が並べてある。

そして、そのうちの一冊を持つて来て、ページを繰った。

「ほら、ここをご覧ください」

沢島は、テーブルの上に、雑誌を開いて、二人に見せた。

「これは、去年の雑誌なんですけれど、七月七日から八月の末まで、約八週間で、ライセンスがとれるわけです。費用が、訓練費、往復運賃、宿泊代を含んで、五十九万八千円です。日本で免許をとろうと思えば、どうしても、百万円近くかかりますからね。それに、日数もばかにならない。その点、このように、集中的に訓練をしてもらう方法なら……」

「どうして、そんなに安いのでしょうか？」

「要するに、向うの方が、飛行機も安いし、ガソリンも安いというようなことではないでしょうか？ ああ、きのう、死体を発見した桂田さんというお医者さんも、去年ハワイで免

許を取って来たんです」

「なるほど、それで、宮森陽子を仲間に入れてやろうとなさったわけですね？」

「ええ」

「それだけですか？」

富平が、食い入るように、沢島の目を見つめた。

「え？」

「いや、彼女と先生の個人的なつき合いぐあいなんです」

「それは……」

沢島は、苦笑しながら、あごを撫でた。

会合の場所は、沢島法律事務所、時刻は午後六時半ということになっている。

等々力隆平が、中内光江を伴って、沢島の事務所のドアの前に立ったのは、六時半を二分ほど過ぎていた。

「罰金二百円か」

と、等々力は呟いた。2 Bクラブでは、時間厳守を標榜しており、無断で遅刻した場合には、一分につき、百円の罰金をおさめることになっていた。

2 Bクラブというのは、苦心の末、やっと決まった名前であった。『とべ』をローマ字で書くと『Tobe』になる。これは、英語読みにすると、2 Bと同じなので、2 Bクラブになったのである。いっそのこと、『二匹の蜂 (two bees)』に

しようという案もあったが、蜂がスカイホーク(鷹)を操縦するのは、僭越ではないか、などの意見もあって、2 Bに落着いたのだった。

しかし、等々力が部屋の中にはいると、桂田と沢島の二人しか、そこにはいなかった。

「あれっ？ みなさんは」

等々力は、沢島と桂田を見くらべて聞いた。

「いや、矢口さんは、仕事があつて来られないらしい。安瀬さんは、三十分ぐらいおくれるという返事があつた。さあ、どうぞ」

桂田は、そう言いながら立ち上った。2 Bクラブの中では、彼が、最も女性に対するエチケットを心得ている。

「ご紹介しましょう」

と、等々力は言った。

「NWAの東京支社に勤めている中内光江さん。ぼくが、仕事のことで、NWAに行ったとき、親切にしていただいてね。彼女も、ライセンスを持っていると聞いたので、自信がないからというのを、無理に連れて来たんです」

「中内と申します。短大にいたころやってみようかなと考え、勤めの合間に、やっと、おとしライセンスをとったのですが、その後、あまり乗っていないんです。だから、いわゆるペーパー・ライセンスなんです。等々力さんが、それでもいいからとおっしゃるので……」

「沢島さん」